

カンボディア・ 西トップ寺院の調査

—第9次—

1 はじめに

奈良文化財研究所はこれまで継続的にカンボディア・アンコール遺跡群のなかの西トップ寺院 (Western Prasat Top) において、現地機関APSARAと共同で調査研究を続けてきた。西トップ寺院は高さ8mほどの中央祠堂を中心とした3塔形式の比較的小規模な石造寺院であるが、近年さまざまな環境要因によって遺跡の崩落が進行している。なかでも2008年5月には中央祠堂の屋根に取り付いていた樹木の根が周囲の石材と共に崩落し、破風が欠損する結果となった。文化遺産保護という観点からも、今後の調査は遺跡の将来的な保全・管理に資する内容に重点を置くことが内外から求められている。

おりしもクレーンメーカーの(株)タダノ (高松市) が西トップ寺院の修復事業のために機材 (ラフテレーンクレーン・高所作業車・カーゴクレーン各1台) を提供して下さることとなり、同年6月11日には現地で贈呈式が執り行われた (図17)。修復事業にはイースター島のモアイ (人面石) 修復や高松塚古墳石室解体に携わった(株)飛鳥建設 (奈良市) の左野勝司氏の協力も得られることとなった。これからの奈文研による調査研究も、今後の修復事業を見据えた形で進めることとなるだろう。

本年度は当初、8月と12月に二回の発掘調査を実施する予定であったが、12月にはタイにおける騒擾のため研究員2名がカンボディアに入国できず、発掘調査を実施できなかった。そのため翌2月に、これまでの



図17 (株)タダノによる提供資材の贈呈式

出土遺物の調査および散乱石材の現地調査が実施された。

(杉山 洋・石村 智)

2 第9次調査

今回の調査は中央祠堂と南塔の関係を確認し、その基礎の構造を解明することを主眼とした。南塔の東辺に沿って東西3m、南北9mの調査区を設置した (Hトレンチ)。第8次調査のGトレンチとは東西中心軸に対し線対称の位置にある。一部は東側へ拡張している (図18)。調査期間は2008年8月4日～8日。

3層の主要な層位を確認した。第1層 (深さ0～10cm) は表土である。第2層 (10～60cm) は灰黄褐色～黒褐色のシルトで、ラテライトの碎片を若干含む。13世紀後半～14世紀頃と考えられる中国製陶磁器をはじめとする土器を含む。中央祠堂および南塔の地覆石の据付掘方はこの層の上面から掘り込まれている。後述するレンガ敷き遺構はこの層に含まれる。第3層 (60～70cm以深) はにぶい黄褐色の粘土で、比較的よく締まり、土器を若干含むものの、その数は少ない。今回の発掘では地山まで到達していない。

第2層の上面で中央祠堂と南塔の地覆石の据付掘方を検出したが、南塔の東面階段には地覆石の据付掘方が検出されず、地覆石が第2層の上面に直接置かれた状況が確認された。一方で、東面階段の地覆石は南塔本体との取り付き部において内部 (西側) に入り込んでいた。このことから、階段は後世に付け加えられたのではなく、南塔本体と同時に構築されたことは明らかである。こうした状況から、もともと南塔は階段がないプランで設計されたが、工事途中で設計変更され

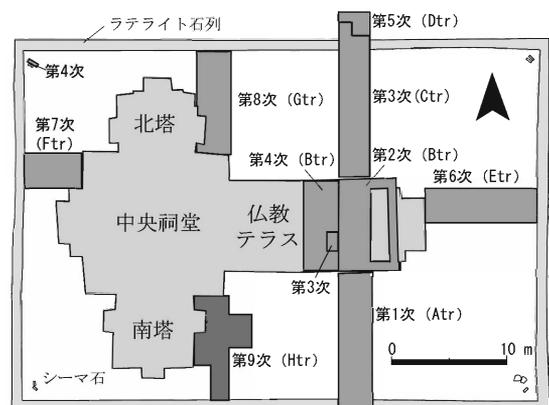


図18 西トップ寺院のトレンチ配置図 1:600

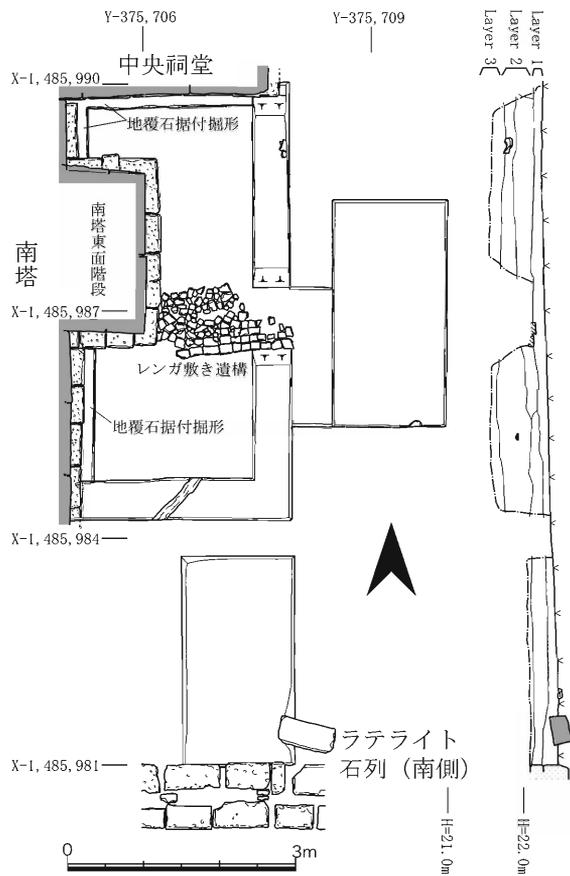


図19 第9次調査遺構平面図・東壁断面図 1:100

たことが想定される。一方、第8次調査ではちょうど対称の位置にある北塔の東面階段について調査したが、そこには地覆石が無く、明らかに後世に付け足された様相を示していた。また階段の建築的構造にも両者の間で差異がある。こうしたことから、両者の階段が取り付けられた様相は異なり、それは北塔・南塔の建築時期の違いを反映している可能性がある。

また中央祠堂と南塔の地覆石の構築状況を検討すると、明らかに南塔が後から拡張されたことが確認された。これはこれまでに想定した建造物の構築順序と矛盾しない。

南塔の東面階段の前面には、南北約100cm、東西約180cmの範囲でレンガ敷きの遺構が確認された。東側の拡張区はこの分布範囲を確認するためのものだったが、分布はそこまで及んでいなかった。レンガは第2層の上面に一段分敷かれていた。この遺構の性格は不明であるが、レンガは西トップ寺院本体では使用されていない建材である。第6次調査(Eトレンチ)で検出され

た下層遺構との関連も示唆される。

今回の調査においても、掘込地業や砂地業といった基礎地業は確認されず、中央祠堂・南塔ともども、比較的軟弱な整地土の上に直接構築されていることが確認された。
(豊島直博・石村)

3 散乱石材の調査

西トップ寺院の遺跡の周辺、とくにラテライト石列の外側の北・西・南辺には多くの石材が列状に並べられており、石材には彫刻が施されたものが多い。これは1920年代にフランスのEFEOが西トップ寺院のクリアランス発掘と部分的修復をおこなった際、転落石材を片付けたものと謂われている。これら石材についてもこれまで順次調査し、インベントリーを製作した。

石材に施された彫刻のモチーフで多いのは仏陀像で、結跏趺坐し触地印を結ぶものが主体で、破風の三角小間(tympan)に配される。仏陀が単体で配されるものと、仏陀の両脇にひざまずく供養者像が拜されるものがあり、破風の大きさに応じて配置が異なる。こうした仏陀の表現は上座部仏教のものであり、ヒンドゥー教および大乘仏教の寺院が多いアンコール遺跡群の中では非常に珍しいものである。

こうした仏陀像のモチーフは、アンコール王朝の衰退とともにタイから上座部仏教が浸透してきた14世紀以降の状況を示すものと考えられる。そしてこのモチーフは、表現の差こそあれ、中央塔および南北両塔のいずれの破風にも認められる。建築学的・考古学的に見るとこれらの建物の建立には時期差があるが、彫像のモチーフには共通性が認められることから、いずれも上座部仏教の寺院建物として機能していたと考えられる。もっとも、後世における改修の結果である可能性も否定できない。

いずれにせよ、西トップ寺院はアンコール遺跡群において数少ない上座部仏教寺院であり、おそらく石造仏教寺院ではアンコール王朝の最後期に建立(もしくはヒンドゥー教寺院から改築)されたものである。本遺跡は、アンコール期からポスト・アンコール期への社会変化を探る上で非常に重要な位置づけがなされるものである。

(石村・佐藤由似/奈良文化財研究所カンボジアプロジェクト・杉山)